

でも検査をしてよしということで、次、第三分所へ入って最後の分所です。ここでもすっかり視力検査からいろいろな検査をして船の来るのを待ちました。

やがて、私たちの乗った船は信濃丸でございましたが、信濃丸がきまして船に乗ったわけです。船に乗るときには一人一人名前を呼ばれて、そして船に上った記憶があります。その船に乗るまでもし何かがあった人はまた帰されるんだということだったわけです。船に乗ればもう大丈夫だということで、ビクビクして船に乗るのを待ったわけです。名前を呼ばれて、タラップを駆け上るときにはもう一目散という形で駆け上りました。そして船に入り、船に入ってもまだ港から出ないうちは安心できません。船に入って横になりました。そこには日本人の船員がおりましたし、また警備兵もおりまして、やれやれようやくと日本へ帰れるかということになったわけです。船は静かに港を離れて日本に向かって走ったわけです。

最後に、あの船が三日か四日ぐらいで舞鶴に着いたわけですが、あの舞鶴で日本の島を見たとき、きれい

な色、鮮やかな緑の松を見たときには、ああ、これで本当に日本に帰ったんだと、もう涙が出てしようがありませんでした。今まで本当につらい思いをして、この日のくるのを何度待ちわびたことか、そう思ったときに、そして目にも鮮やかな緑の松と島々のあのきれいな日本の国を見たときには、本当に涙が出て、よしこれで帰ったんだと、これで本当に帰ることができたんだという考えにひたったことを覚えております。

餓鬼牢獄

岐阜県 服部 酒造雄

最初の収容所へ足を踏み入れたのは、二十年十月も末のことであった。シベリア第二鉄道建設（バム鉄道）基地タイセツトから分かれ、五十八キロメートルの地点の第八ラゲル。捕虜五百人が、食うや食わず、長旅の果て、疲れ切った姿での入ソだった。二重に張りめぐらされた鉄条網、広い敷地の四隅に高い望楼が立

ち、ソ連の警備兵が自動小銃（マンドリン）を持ち、昼夜、厳重な監視のもとに置かれることになった。

満州から持ち込んだ日本製の二重テントを、自分たちの寝起きのために、早速、組み建てることから作業が始められた。カラ松の丸太は節だらけで、敷いても床下から冷たい風が容赦なく吹きつけてくる板で、両側に上下二段、一幕舎五十人の割当てで、ビストラダバイ、ダバイの叱咤（しった）にせきたてられて、ようやく日が暮れての完成であった。

入ソ以来の飢餓状態は、この時点から始まっていた。うわさには、三度の食事が与えられると聞かされ、ほんととしたのも束の間、飯上げ当番が後生大事に運んできたたるを、われ先のにぞき込んでみると、シャブシヤブの、スープまがいのコウリヤンがゆと、一日分三百五十グラムの酸っぱい黒パンを一度に持つてくる。これだけの食物で、凍てつく極寒の地の作業に狩り出されても、どれだけのノルマが果たしてできるやら。ただでさえ、長い貨車の旅ですっかり疲れ、その上、ろくに食物も与えられず、栄養失調の多い兵は、恐ら

くばたばたと倒れてしまうことだろう。

朝配られるその三百五十グラムのパンは、見たが最後、三度に食べると言われても、腹の虫がおさまらぬ。後はどうなろうと知っちゃあいねえやと、ただ満腹感に魅せられ、一遍に口の中へ押し込む連中も出てくる始末。満州を離れてからもうずっと、寝ても覚めても食べ物のことばかりが頭から抜けない。

「あのときのぼた餅って、本当によかったなあ！ まんじゅうを腹いっぱい食べてえなあ！」

餓鬼道の様相が、期せずしてだれもの頭に浮かぶ。

このラーゲルに入って間もなく、予知もしていなかった大変な事件が起きた。私も経験があるのだが、野戦貨物廠だった関係で、こんなこともあろうかと、万年筆、腕時計など、ソ連人の喜びそうなものを二、三、隠し持っていたが、背に腹はかえられず、シベリア沿線中のロシア人の物々交換に応じ、黒パンと取りかえて失ったので、現在は手にはないが、ある兵が、万年筆とコルホーズの婦人の持ってきた黒パンとのやりとりが、二重柵の内、外で行われる寸前、非業にも発見

され、望楼兵に射殺されたことだった。以後の見せしめとして、思い切ってやったことだろうが、これはあまりにも悲惨なできごとだった。

最初のころは、毎日決まってまき取りに狩り出された。赤松やシラカバの密林へ行き、雪の中に倒れて朽ちかけた木材を探し出し、凍てついたその丸太を足で蹴り倒し、重い足取りで、太いものは二、三人がかりで、ラーゲルへ運んだ。その材木はまきとして幕舎へ持ち込まれ、ペーチカでの燃料となり、せめてもの空腹と疲労をいやす糧ともなった。それでも、体力は日に日に衰え、だれの顔を見ても、満州以来、二、三度しか洗ったこともない、あかとすすで黒焼けし、目だけはくぼんだ面ほおの中に一種異様な殺気さえ感じる。刺すような光を持った目である。

初体験だったが、シベリアの冬は明けても暮れても灰色の空からチカチカと粉雪が舞い、風に吹きつけられると、ほおは刺すように痛い。降った雪は、明くる年の、春とは言っても六月ごろまでは絶対に溶けもしない。呪いの雪だった。予期してはいたが、十二月に

なると、気温は猛烈に下がり、零下三十度以下が毎日続く。そんな状況下、一週間もたつと、正式な作業が割り当てられた。

防寒服に身を固め、目以外はすっぱり、凍傷を防ぐため何かの布切れで防寒帽をおおっての作業集合。木材の伐り出し、鉄道敷設のバラスの石切り、製材所、れんが焼き等まで。一番過酷なのは、その石切り作業というだれもが恐れた作業だった。集合が広場にかかり、人員点呼のため、アジン、ドバー、テリーと数える、長い外套にマンドリンを抱えたソ連兵がやってくる間、足を踏みならし、寒さに耐えて待つことのどんなにかつらかったか。のろい点呼が終わると、それぞれの現場へ、彼らマンドリン兵に追われるように、重い足取りで出ていくのだった。

そんな道すがらでも、ウの目タカの目のように鋭く、食べられそうなものを探し始める。道端に落ちた馬糞まで馬鈴薯と間違えて、競って拾い上げてみれば、それとわかり、がっかりしたり、キャベツの切れ端を拾っては口に入れる。こんなシベリアの僻地での、た

れ死にはなりたくない。恥や外聞なんか切り捨て、少しでも食べられそうなのは何でもあさって口に入れるのであった。

最初の年越しに一番犠牲者が出た。あちこちの幕舎で、日夜、バタバタと栄養失調で倒れていった。十分な手当ても、薬も与えられず、見守ってくれる者もなく、寂しく息を引き取っていった。墓標一つ立てる余裕もなく、供える花すらない。凍てついた肉体は、まるでろう人形のようになり、雪の荒野に運ばれ、着衣はソ連兵にはぎ取られ、素肌のまま、カチカチで掘ることもできない林の地面に、野ざらしにされるのである。恐ろしいあのオオカミの餌食となることを承知の上でのソ連兵のやり方であろう。

我々作業兵の野外とは打って変わって、営内作業、特に炊事当番兵にはうらやましい限りであった。ここへ来てから、彼らはみるみるうちに血色もよくなり、身体も太つてき、元気に立ち働いている姿を見せつけられると、自分たちの姿が情けなくて泣けてくるのである。餓鬼にもならず、食べ物は腹いっぱい食べ放題、

まるで天国と地獄の差だ。そんな炊事場の夜半、だれもない暗やみの中、毎晩のように人影があらわれる。戸外に放り出された残飯捨てのゴミだるの中、馬鈴薯の皮、キャベツの腐りかけた葉切れ、砂糖大根の切れ、中には、たまに羊の肉の少しついた骨でもあれば最高のら犬のようにだれかが忍び寄る。持ってきた飯盒にすばやく詰めると、こそこそと幕舎へ引き上げる。そのままでは到底食べられないので、舎外からの一握りの雪をその飯盒に入れ、配給でこっそりためこんでいた岩塩で、燃え盛っているペーチカの上で煮つけることができれば幸いだ、夕食後から皆が寝静まる前までは、いつも五、六個の飯盒で満杯で割り込む余地もない。寝静まった夜半を待つより手がない。ところが、その夜半はうとうとしていると、飯盒ぐるみこっそり盗まれて、取り返しのかかぬことが起きる。

捕虜生活のうち、飯盒は命から二番目に大切なものだ。たとえ体を失っても、飯盒だけは手放すわけにはいかない。乞食の椀と一緒に、飯盒を持たぬことは生きる権利を奪われたに等しい。そんなことで盗まれよ

うとは泣くに泣けない。どこからか手に入れた針金をしつかり飯盒に結びつけ、おのれの寢床まで張り詰め握って、だれか飯盒にさわるやつがあれば、すわつとばかり飛び起き確かめることができる。その間は仮眠さえ許されない。私も二、三度、背に腹はかえられず、炊事場あさりをし、満腹感に浸ったことがあったが、とうとう飯盒ぐるみ盗まれて失う羽目に出会ってしまった。どうしたことが、針金をしつかり握っていたつもりでも、うとうとしていた間に、隠し持っていたペンチか何かで、見事、飯盒のもとからぶつり切られて、針金だけ残されて失った。

犯人はこの幕舎の中に確かにいる。発見されるのを恐れ、ほかの舎内の者と飯盒を交換し、涼しい顔をしているに違いない。同胞の飯盒を盗むとはひどいやつだが、盗まれた本人は、一体、これからどうやって飯盒を手に入れようか。背に腹はかえられず、またどこからか盗んでくることと考えてみれば、結局、盗みのたらいまわしとなってしまうことに気づくと、どうしても決行することができなかった。当分は仕方なく、

飯盒のかわりになるものを早速探すより手がなかった。都合よく、次の日探し当てたのが、ソ連人の捨てた、飯盒より少々小さかったが、空き缶を拾うことができた。

残念なことながら、器が飯盒と違うため、配給される食べ物、少しずつ皆より量が足りないことに気づいたが、これは自業自得で仕方ないとあきらめることにした。ところが、それを見かねて心配してくれた、隣で寝起きしている古兵の山口が、どこで手に入れたのか、加藤とナイフで刻みこまれた凸凹のある飯盒を持つてきて、これを使えと親切に渡してくれたのには、涙が出るほどうれしかった。今どき、そんな員数外の飯盒のあるはずがない。恐らく予想されることがある。それは、ちょうど三日前、このラーゲルで栄養失調で亡くなったという五人の兵。そのうちの持ち物の一個ではなからうかとも考えられたが、せっかく親切にもらった相手に悪く、つい口にすることも遠慮し、厚く礼だけは言っておいた。それからしばらくは、飯盒に入れた食べ物を口にするたびに、食べることをさ

できず、亡くなった戦友のしかばねが思い出され、のどにつかえることがあるたび、いや、その戦友は、「君はおれの飯盒でおれの分まで十分に食べ、生き残って故郷の土を踏んでくれ」と叫んでいるのだと思い直した。

三月の声を聞くと、本格的なバム鉄道の建設作業が始まることになり、ラーゲルでしきりと人員移動が行われた。私たちの大隊の一部に移動命令が下った。三百人中に加えられ、奥地に向かって出発した。一行は、十キロほど先まで通じている支線の貨車に乗せられ、それから先は徒歩行軍だった。入ソ当時の持ち物はほとんどなくなり、雑のうと飯盒、水筒だけの軽装ながら、防寒外套と防寒靴は重く、マンドリンと銃剣に監視された一行は、白い息を吐きながら黙々と歩き続けた。

しばらくすると、雪と枯れ木の位置の中に小高い丘が広がり、望楼がまるで威嚇しているように見下していた。そこがタイセツトから百キロ離れた地点のラーゲルで、今までの幕舎でなく木造の収容所で、三棟あ

った。現在は無人の様子だった。重い足取りで舎内へ入ったが、今までとは打って変わって広く、二段ベッドでないことが何より気を落ち着かせた。

「オイ！この文字を見ろよ。ドイツ兵が収容されていたところなんだ」

ベッド横の板壁に、ナイフか何かで刻み込まれた文字を指さした、正木といていた彼は、明治大学出の軍曹で、みんながインテリ兵と呼んでいた。

「女の名らしいなあ」と言いながら、しばらく何かを想像するように考えていたが、「きつと、親しかった恋人を彼は国に残し、きついシベリア送りにされ、この文字を刻むことによって懐かしい彼女との想い出、そして望郷の念にかられていたんだよ。彼もまたふるさとに、そんな女性を残してきたんじゃないだろうか。

日本兵の入ソ以前から、独ソ戦で自分たち同様捕虜となつて、シベリア送りされていることは、私たちにも聞かされていたが、まさかこんな僻地まで送り込まれていようとは思ひもよらぬことだった。しかし、

彼らは恐らく自分たちより早くから入ソして、日本兵の捕虜と交替し、祖国へ帰還していったことであろう。一体、私たち日本兵はいつになったら帰られることであろう。かなりの死亡者が続出しているというのに。ペーチカの火がゴーゴーと音を立てながら燃えさかっている周りで、ほんやりうつろなまなざしで考えこんでいる自分たち。かつての関東軍も、今は誇りも面子もかなくなり捨てた。ルンペンそこ負けのすすけたひげ面が、燃えるペーチカの火に赤々と醜く照り出されていた。

その翌日から、鉄道敷設のため道路建設に狩り出された。ゴムタイヤの日本の一輪車とは比べようもない鉄の輪つばは重く、思うように前へも進まない。砂をいっぱい入れて、五百メートルも運ばされると、一回でもうへとへとで身動きができない。マンドリンをさげたソ連兵が飛んできて、「ヨッポイマーチ、ピストラダバイ」と小銃の先で突きかける。まだ、それでも私は立ち上がれないでいると、よほどくたびれたヤボンスキーと観念したのか、しぶしぶほかの兵と交替さ

せてくれた。へとへとになってラーゲルへ帰ってくと、ベッドに横たわることが精いっぱいだった。

あたりが暗やみになると、もう夕食ときで、「飯盒集合！」ガチャガチャ飯盒の音がし、当番兵がそれを集める。やがて舎内のあちこちに松明（たいまつ）が燃やされる。飯上げ当番が桶を担いできて、飯の分配が始まる。

「オイ！もつと松明を近づけんか！」飢えた目が異様にキラキラ、飯盒に集中した。ドロドロの薄いコウリヤンがゆ、もみ殻が黒く浮いている。すると突然、

「オーイ、ウサギの肉だあ！ここですき焼きといこうや」

大声がし、凍てついてバリバリ音のする防寒服をたたきながらひげ面の兵が、ちょうど二匹分ぐらいの肉の塊を板に乗せて入ってきた。ひょうきん者の山田兵長だった。すでに毛も皮もはがされ、小刻みにすれば、すぐに立派なすき焼きとなるのだった。どこでどうして捕り、皮まではぎ取ってきたかは、だれもがそのときには不審がる者もいなかった。一斉に大声で「ハラ

「ショー！」と喚声があがった。五十人全員に割り当てられても、一人当たりどれほどの肉切れにありつけることやら。それでもあの肉の感触だけは確かに味わえそうだった。

こうしたときには、今までとは打って変わって、全員こぞっての協同作業に移った。没収を免れたナイフがどこからか持ち出され、器用に小刻みにする者。ひそかに隠し持っていた添えものキャベツ、馬鈴薯、砂糖大根、味つけの砂糖。あるところにはあるもので、特に驚いたのは、軍用に使っていた固形醬油までこのときとばかり飛び出す騒ぎ。ドイツ兵の残っていた、鹽（たらい）大の鍋をペーチカに乗せると、兵の目は一斉にそれに注がれた。

すき焼き独特の匂いが舍内に漂い始めた。大分煮えあがってきて、長い棒でかき混ぜていた二人が突然叫んだ。

「ばかに泡が立つじゃないか」

「シベリアのウサギって食べたことはねえが、少しぐらい泡だって立つさ」とだれかが言った。もうだれ

一人としてそれを不審がる者もいなかった。飯盒のふたに分配が終わると、さつき配られた冷えきったコウリヤンがゆと一緒に食べ始めた。

「結構いけるじゃないか」と、そんな声も聞こえる。私も満州の東安で、キジ狩りに狩り出され、よくその肉を食べさせられたが、その肉より極端に柔らかく、口の中に溶け込んでいた。久しぶりの肉の感触に、満腹とはいえなかったが、それぞれにみんなの腹の虫はどうやらおさまったようだった。

三月の声を聞くと、零下四十度を超すことがある。野外は気味悪くなるほど、霧のようなもやが立ち、無風状態となる。こうなると、もう作業なぞ思いもよらず、舍内待機の命令が出る。そんな日が毎日続けばと祈りたくなるのだが、雪解けの六月までに、たった二度あっただけだった。ここへ来てからの作業は、日増しにノルマに追われる日が続き、栄養失調者が続出し始めた。朝の暗がりから、夕の暗がりまで、道づくりに従い立てられ、恐ろしい寒気との闘い、重い防寒服はわずかに残った体力をいやが上にも消耗させた。み

んな不思議なほどよく転んだ。自分では足を上げてい
るつもりでも、すぐにつまづきのめった。きのう一人、
きょうもまた、次々と朽ち木のように倒れていく。完
全な栄養失調死である。

あのウサギの肉にありついた日が思い出される。あ
るそんな朝、円びを担いでラーゲルを出ていく途中、
バツリ倒れた兵がいた。「こやつ！ 仮病を使いおっ
てもなく、どなりつけた。ソ連兵の点取り虫と、常日
ごろから嫌がられていた鬼の分隊長が仕方なく引き起
こしたら、もうその兵は事切れていた。これはもう他
人ごとではない。迫りくる栄養失調死のあつけなき、
恐ろしさ。私は何としても生き延びて、故郷へ帰らね
ばならない。シベリアの飢えと寒さのこの飢餓牢獄か
ら、いつになったら抜け出せることであろう。

ところで、ウサギのすき焼きで腹の虫をおさめたあ
のウサギは、実はドイツ兵が飼っていたと思われる猫
だった。

その、猫のすき焼きだったことがわかったのは、七

月の雪解け初め、その下から、湿ったかぐわしい黒土
があらわれ出すと、森の木々は一斉に春の息吹に躍動
する。そんなある日、ラーゲルの鉄条網付近の雪かき
作業が始まった。ドイツ兵のはいていた短靴の片割れ
や、ぼろぼろになって使うことのできないズボンなど
が、黒い土と一緒に発見される。

「オイッ！ 猫の皮じゃねえか！」 っり皮手袋に額の
汗をこすりながら一人の兵が叫んだ。あつち、こつち
から続けて猫の皮とはつきりわかるものが、四、五匹
分、かき出されてきた。だれかがつぶやく。

「ああ！ とうとう哀れにも、ドイツ兵がせっかく大
事に飼っていた猫を、いくら餓鬼と落ちぶれていても、
それを殺してすき焼きにするとは、情けない日本兵」
今さらながら、どうにもならない悔やむ心はみな一緒
だった。猫と承知の上で、暖炉のペーチカに差し出し
た主人公の兵は、それから一か月ほどたつてからどこ
かへ移動させられていなくなっていることに、我々は
ほっと安堵の胸をなで下ろしたものだつた。

その年の九月初めの身体検査日に、ソ連軍医がラッ

バの聴診器で胸を診たあと、後ろ向きにさせ、尻を二、三度つねってみて、「ラボータ、ニナーダ」と言った。どうやら栄養失調になったらしい。そういえば、このごろ体がむくみ、ところどころ黒い斑点が目につくようになった。早速の移動である。恐ろしかったバム鉄道建設現場から解放された喜びと、果たしてこの栄養失調が治るのであるうかの不安が、交互に私の頭に入り乱れる。タイセット近くの第五収容所へ戻された私は、四グルに組み入れられ、作業抜きの特権へ移った。おかげで二か月もたつと、全快に近い体に復調したのも束の間、同じ四グルになっていた、林といっていた兵と二人、日本人捕虜の糧秣受領に狩り出されたのであった。マンドリンを背負ったソ連兵三人に守られ、馬そり一台に馬二頭、二台のそりはもう夕暮れだというのに、せきたてられての出発だった。場所は知らされなかったが、なんでも二十キロほど離れたコルホーズと聞かされた。

出発時には雪も降っていなかったのに、小一時間もたつと、もう行き先は四十センチほど積もり、三時間

くらいかかったころ、難波の末、ようやくたどり着いたコルホーズには、囚人らしい老夫婦に案内され、小麦粉、馬鈴薯の重い袋を担いで馬そりに乗せるともうすぐ出発だった。時計は持っていなかったが、夜半一時ごろだと思った。深い雪を分けての輸送は、夜目にも馬の大きく吐く息が苦しうに感じられる。ところが突然、先頭の馬がヒッヒッと叫ぶと同時にピタリととまってしまった。

ソ連兵がむちを当てたが、四頭ともびくとも動かず、両耳を立て、何かを探る気配にソ連兵は感が早かった。進む前面に立ちふさがる黒い林の中から、異様なウオーとオオカミとしか思えぬうなる声に、「ヤポンスキー、ヤポンスキー」あとの叫び声は私たちには通じなかったが、手まねですぐ馬そりの上に伏せろと指さした。オオカミに襲われるという思ってもみなかったこの出来事に、二人はあわてふためいた。すぐさま馬そりの上に身を伏せたと同時、たしか四、五匹の集団らしいオオカミの雄叫びが、周り近くでほえたてた。ソ連兵は、たびたびこういう場面に遭遇しているのであ

ろう、みなあわてず、一斉に空に向けて激しく小銃を撃ち続けた。おかげでオオカミは退散したらしく、あたりはもとの静けさに戻った。本物のオオカミは見られなかったが、実に恐ろしい、私にとっては二度と会うことのない出来事だった。

わずか二年間とはいっても、私にとっては、生涯頭から切り離されないであろうシベリアの過酷な、言語に絶する重労働と餓鬼牢獄から解放され、二十二年の五月二十八日、懐かしいこの祖国へ、引揚船高砂丸で帰還することができた。

シベリアの思い出

兵庫県 中山 実雄

私は、昭和十七年一月十日、杉江西部六四部隊に入隊。三月十日まで訓練を受け、三月十九日、屯営を出発して、満州黒河第八四部隊に入隊いたしました。満州の寒さ、殊に北の果て黒河は、内地で想像する以上

の寒さでありました。八四部隊の生活は、内地の教育と違って、現役兵のバリバリで、とてもとても厳しいものでありました。ここで約一年、その後、新京関東軍經理学校に入学し、ここで約一か年勉強をいたし、原隊に復帰し、主計伍長に任官とともに、関東軍情報部哈爾濱陸軍特務機関に転属、任務に精励いたしました。

昭和二十年八月十五日、終戦を一面披にて迎える。これから自分の捕虜生活が始まりました。シベリア出發までは、海林、牡丹江の収容所にて何をするともなく毎日を送る。いよいよ満州にも冬が目前に訪れ、寒くなる。ある日、収容所長が訓辞をした。君たちは近日中に妻子の待つ母国へ帰ることができると言った。みんな喜び合った。そのうちに命令が来て、列車の準備が始まった。列車内に水を積み、そしてまき等も積み込んで出発を待った。列車が動き始めた。その列車たるや、貨物列車の有蓋車である。ストープはドラム缶を切ってつくったものである。でも、我々は帰れる喜びでいっぱいであった。